

フランチェスコ・アルカンジェリ
『ジョルジョ・モランディ』についての一考察
——モランディの「検閲」による削除箇所を検討から

遠藤太良

はじめに

本稿はフランチェスコ・アルカンジェリ (Francesco Arcangeli, 1915-1974) による 1964 年のモノグラフ『ジョルジョ・モランディ』⁽¹⁾ (以下「本書」とする) を検討することを通して、アルカンジェリが「不定形」(informe) と表現した作品が、画家ジョルジョ・モランディ (Giorgio Morandi, 1890-1964) の自己表象に含まれるかどうかを考察するものである。

20 世紀イタリアを代表する画家の一人であるモランディは、その生涯のほとんどを生まれ故郷ボローニャで過ごし、ありふれた瓶やどこにでもありそうな風景を描き続けた。同時に彼は自身についての論稿の執筆を批評家に依頼し、その内容に干渉することにより、いわば自己表象のための手段として批評を利用していった。そうして形成されたモランディの自己表象にはこれまで、個々のモチーフがはっきりと輪郭を保つ「定形」(formato) の作品のみが含まれ、モチーフが融解し溶け合うような「不定形」の作品は含まれないと考えられてきた。その根拠の一つとして挙げられてきたのが、本書がその執筆段階からモランディの怒りに触れ、多くの部分を削除された後、出版停止に追いやられたという事実である⁽²⁾。確かに本書がそれまでの批評と異なる点の一つは、モランディの「不定形」の作品に対する評価を全面に押し出したことであるため、出版停止の理由はそうした記述がモランディの意に沿わなかったと考えても不自然ではない。

しかしながら、ここで問題となるのは、モランディが本文において削除した箇所が

いかなるものであったのか長らく明らかにされてこなかったために、モランディが本書のいかなる点を不満に思っていたのか判然としなかったということである。それらの削除箇所が初めて明らかとなったのはアルカンジェリのオリジナルの草稿が出版された2007年である。この削除箇所の検討は、その草稿におけるルカ・チェーザリの序文⁽³⁾を除いてはほとんど行われておらず、そのチェーザリの序文も概略的なものに留まっている。無論、本書がモランディの意に沿わず出版停止に追いやられている以上、削除箇所がどれほどモランディの要請を反映しているのかは明らかではない。しかしながら、そうした削除箇所を検討することでモランディの意に沿わなかった点について少しでも手がかりとなるものが得られれば、モランディの自己表象と「不定形」を考える上で重要なものとなり得よう。

本稿の構成は以下の通りである。まず、アルカンジェリに宛てたモランディの書簡を通して、モランディが具体的にいかなることを危惧していたのかについて考察する。その後、本書の削除箇所について、それらの書簡から明らかにモランディの「検閲」の結果であろうと考えられる部分を中心に考察していく。

I. モランディの書簡

先にも述べた通り、本書における削除箇所のどこまでがモランディの要請によるものであるかは判然としない。それ故、モランディの「検閲」による削除箇所について検討する前に、まずはモランディとアルカンジェリとの間にかわされた書簡を通して、モランディが本書の具体的にどのような点に対して危惧していたのかについて考察していく。

モランディは1950年代からすでにアルカンジェリに本書の執筆を依頼していた。アルカンジェリはその申し出を名誉なことと思い、また、モランディもその内容に期待していたことが当時の書簡から伺える。

しかしながら、徐々に雲行きが怪しくなる。61年にモランディからアルカンジェリに宛てられたた手紙には以下の様にある。

重ねてあなたに強くお願いしたいのは、あらゆる論争を避けるというわたしの願いに配慮していただきたい、ということです。とりわけ、これらの草稿についていうと、(ジュリオ・カルロ・)アルガンとの論争がそうです。さらに、政治家たちとの論争についても同様です。私の間違いでなければ、T (パルミーロ・トリアッティ) の書くものは、もっぱら文学の世界のみに関わっているのです。

すでにあなたに口頭で申しあげたように、わたし個人に捧げられた出版物のなかで訴えられている人々は、当然のことながら、私自身が彼らについての判断を前面的に認めている、と勘違いするでしょう。⁽⁴⁾ (()内は引用者による)。

ここで登場するアルガンとはモランディとも交流のあった美術史家ジュリオ・カルロ・アルガン (Giulio Carlo Argan, 1909-1992) である。また、Tと表記されているのはイタリア共産党の重鎮であったパルミーロ・トリアッティ (Palmiro Togliatti, 1893-1964) のことを指す。実際にどうであるか、あるいはそのような懸念が妥当であるかどうかはさておき、モランディは本書の記述が自身の意見として友人たちに受け入れられ、そのことによって無用な論争に自身が巻き込まれることを危惧していたのである。

約一か月後の手紙において、モランディの語気はさらに強いものとなる。

あなたがわたしのモノグラフのなかに準備なさっているテキストのなかにある、無用な論争は控えていただきたい、ということです。とくに、(ジャン・)カスー、アルガン、そして誰よりもチェーザリ・ブランディに関してのものです。

さらに忘れないでいただきたいのは、あなたが書かれるすべてのことは、当然のことながら、どれも私が承認しているものだとして受け取られてしまうだろうということです。⁽⁵⁾ (()内は引用者による)。

先の手紙においても言及されていたアルガンに加え、やはりモランディの友人であり美術史家であったジャン・カスー (Jean Cassou, 1897-1986) やチェーザレ・ブランディ (Cesare Brandi, 1906-88) の名前が持ちだされている。そして、モノグラフの内容が自身の意見として解釈されることに対する危惧が繰り返し述べられており、他者との関

係に極めて神経質なモランディの姿が見て取れる。

ここで挙げられている人物の中でとりわけ強調されているのがブランディである。彼は1939年に「モランディの歩み」⁽⁶⁾という論稿を記している。その論考は、本書と同様、モランディ自身の要請とその検閲を経て記されたものである。その内容はモランディを「孤高なフォルムの探求者」と位置づけるものであり、モランディの自己表象の公式の見解と考えられてきた。後述するようにそのテキストには必ずしも「不定形」の作品に対する肯定的な言及がないというわけではない。しかしながら、モランディの「孤高なフォルムの探求者」という側面を強調していると読み取れることから、この論考は長きに渡り、時代の潮流に左右されず、「定形」の作品を描く画家というモランディのイメージを擁護するとともに、「不定形」の作品を軽視していたことを示すものとして考えられてきた。そしてこうした見解をアルカンジェリも有していたと考えられる。

以上、モランディの書簡から読み取れることをまとめよう。まず、モランディの危惧は、本書の内容がそのまま自身の解釈として受け取られ、他者との関係が悪化することを恐れるというものであった。そして、「不定形」に関する記述に対してどのような見解を持っていたかについて、書簡から読み取ることはできなかった。

II. モランディの削除箇所

本書における削除箇所は多岐にわたるが、一文にも満たないわずかな分量の箇所や、アルカンジェリ的事实誤認と思われる箇所が多くを占める。それ故、本稿では、まとまった分量を要し、かつ、先の書簡から明らかにモランディの「検閲」によると思われる箇所について検討し、そこに「不定形」に関する記述が含まれるかどうかについて考察していく。

まず、書簡で具体的に名前をあげられていた人物のうち、カスーに関する箇所は削除されていない。このことから、アルカンジェリがモランディの要請の全てを受け入れていたわけではないことが改めてうかがえる。

アルガンに関する削除箇所としては、オリジナルにおいては削除され、第一版の出

版に際して復元された以下の箇所が該当する。

アルガンは、二年前、弟子の助力を得た現代絵画についての「大作」において、この点について、矛盾する態度を取った。(一方では「形而上絵画」を、漠然と左翼に歩調を合わせた政治や批評の安易な用語をもって本質的に反動的な「秩序回帰」として解釈し、他方で、イタリアの形而上絵画が「重要な位置」を占めており、とりわけ、それらの中でモランディがもっとも優れたものであることを、使い古されたクローチェの「詩の擁護」という漠然とした言い回しでもって、認めているのである)。(7)

この箇所においてアルカンジェリは、アルガンが「形而上絵画」を政治性と結び付けて解釈していることを批判的に論じている。先の手紙の内容を考慮するなら、モランディはこうしたアルガンに対する批判が自身の見解として見なされ、関係が悪化することを恐れていたのだと思われる。

同時に、後半部分において、モランディを形而上絵画の中で最も優れたものとして述べていることも注目される。本書においてアルカンジェリは、それ以前のテキストでは過渡期的なものに見なされていたモランディの形而上絵画を積極的に評価している。そのことは、モランディの画業の最初の数年に過ぎないこの時期の記述に本書全体の三分の一程が割かれていることからもうかがえる。しかしながら、このモノグラフが執筆された当時のモランディ本人は、こうした形而上絵画の時期をあまり肯定的に捉えようとはしていなかった節がある。そのため、その代表者として自身の名前が出されることを認めていると受けとられれば、形而上絵画の時期を肯定的に評価しているように考えられる恐れがあり、そうしたことを避けようとして本箇所を削除させたのではないだろうか。

先の手紙においては政治家であるトリアッティの名前もあげられていた。彼に関する削除箇所は1910年代のイタリアの芸術について語る中で以下の様に展開される。

トリアッティは以下の様に明言している。唯物論者とイタリアにおける社会主義の実証主義的な墮落（つまりブルジョワ）が、「より多様な形式と観念論的で、精神主義的で、社会学的に創作を行い、そして、抽象的でイデオロギー的な実態を崇拜し、単純な現実を軽蔑するような、反動的に歴史を解釈しようとする風潮で満たされた」反民主的な空虚を創り出したのだと。トリアッティと論争するというような意図はないが、以下のことは明言しなければならない。レーニンのマルキシズムにおいて（スターリンのそれについては言わずもがな）、（中略）まさに同様の事柄が存在しているということ。 （中略）トリアッティはまた、極めて強烈かつレーニン主義的な起源において、まさにそうした「マイノリティーの文化」の側に立つのだが、そこには、彼が反動的という風に告発する作家（や芸術家）も所属している。⁽⁸⁾

トリアッティに対するアルカンジェリの非難がうかがえる。それは先の書簡におけるモランディの言葉を借りるなら「論争」とも呼べるものである。モランディは取り立てて政治家と交流を持っていたわけではない。それ故、この箇所が彼の人間関係を阻害した、あるいは、その内容が彼の政治信条に反していたと解釈するよりも、自身に関わりを持ってこなかった政治的な事柄についての無用な論争に巻き込まれることをモランディは避けようとしたのだと考えるほうが妥当だろう⁽⁹⁾。

以上のように、ここまで見てきた削除箇所はモランディと他者との関わりに関するものであり、「不定形」に関する記述は見られなかった。それでは、先の書簡においてとりわけ強調されていたブランディに関する箇所についてはどうだろうか。

彼に関する削除箇所は、モノグラフの中盤、1920年代のモランディの作品に言及する部分で現れる。

モランディの作品におけるある種の側面についてブランディは軽視した。（中略）レンブラントの絵画に関する「直接的で官能的で攻撃的なはげ口」との言葉を、あの「唐突で不確かな流れ」、つまりブランディが非常に明敏に理解していながらも、モランディの21年から24年の絵画においては肯定的には論じなかった、

あの「唐突で不確かな流れ」と十分に一致すると答えて終えることは、特異ではあるが驚くことではない。(中略)あの「ねばねばとした曳光弾のようなマチエールの残滓からなる光のナメクジ」を、キャンバスの上に固定され絞られて、保持しているのが、この論点に私たちを導いた《花》のような作品であることは明らかだ。そして、その「ナメクジ」は、ブランディが、その鋭敏さを持っておそらく愛したであろうレンブラントの背景において直観的に理解したものである。しかし、彼の美学は、根本的にプラトン主義的、あるいは新プラトン主義的なものであり、それを思いとどまらせる。(10)

この箇所における「唐突で不確かな流れ」とは、先の論稿「モランディの歩み」においてブランディが1920年のモランディの《静物》を指して用いた表現である。そのように述べることで、ブランディは、この作品の実体と影が交差しモチーフの輪郭が曖昧となっている点を評価している(11)。

同時に、アルカンジェリもまた本書においてその《静物》について言及している。そこにおいてアルカンジェリはこの作品が、後のモランディの「不定形」の作品を示唆するものとして記述している(12)。そして、そこで示唆されていた「不定形」の作品の例としてあげているのが、上記の削除箇所ですべて述べられている《花》なのである。

こうしたことを踏まえれば、この削除箇所においてアルカンジェリが言わんとしたのは以下のことであろう。「不定形」の要素を含む1920年の《静物》やレンブラントの作品に関する言及から見て取れるように、ブランディはモランディの「不定形」を示唆する作品を評価していた。そうであるにもかかわらず、はっきりと「不定形」である《花》のような作品を評価しなかった。すなわち、ブランディは、モランディの「不定形」の作品を評価するにやぶさかではなかったにもかかわらず、自身の美学に固執するあまり、その価値を否定したとアルカンジェリは考えたのである。

この見解が削除されていることについて考える上で重要となるのが、他ならぬブランディのテキストの内容である。そこにおいてブランディは確かに、上記の削除箇所ですべて触れられている21年から24年の時期についてはモランディの自画像にわずかに言及するのみであり、《花》のような「不定形」な作品には言及していない。しかしながら、

否定的な言及をしているわけでもないため、ブランディがその時期のモランディの作品を肯定的に捉えなかったと言い切ることはできない。加えて、この削除箇所述べている20年代前半と並んでアルカンジェリが「不定形」の作品が多く見られるとしている29年～36年の時期の作品については、ブランディも言及している。そこにおいてブランディは、この時期に見られる「不定形」の作品について、「遠近法的構築」(costruzione prospettica)と「色彩的構造」(struttura cromatica)の間の揺らぎという観点から解釈している。すなわち、「定形」の作品は「遠近法的構築」を重視した作品であり、「不定形」の作品は「色彩的構造」を重視した作品であるというのである。その解釈が妥当であるかどうかについては別途検討する必要があるだろう。しかしながら、ここで重要となるのは、そうした解釈の妥当性ではなく、「不定形」に関する言及が否定的なニュアンスを帯びることなくブランディのテキストにおいても存在しているということである。29～36年の「不定形」の作品をブランディないしモランディが評価していたのなら、20年代前半の「不定形」の作品についてもその価値を否定的には捉えていなかった可能性は大いに考えられる。そのため、ブランディが20年代のモランディの不定形の作品を評価しなかったとするアルカンジェリの解釈を、モランディが自身の見解と取られることを恐れ削除させたということは、彼の自己表象に「不定形」が含まれるということを示唆していると言えよう。

最後に、手紙においては触れられていなかった他の芸術家についての削除箇所にも触れておこう。先のブランディに関する部分においても触れられていたレンブラントに加え、ピカソやドランの名前が挙げられる。これらの箇所においては、そうした画家達に対するモランディないしイタリアの優位性が述べられており、挙げられている画家も含めて不定形に関する言及というわけではない。また、アルカンジェリがしばしばモランディの「不定形」の作品と絡めて述べるモルロッティ(Ennio Morlotti, 1910-1992)ら同時代のアンフォルメル画家達に関する箇所は削除されていない。これらの箇所がどの程度モランディの要請を反映したものであるかは定かではない。しかしながら、仮にそれらが全て彼の要請によるものであったとしても、書簡や他の削除箇所に見られた「論争を避けてほしい」というモランディの意図にそったものであり、モランディの自己表象と「不定形」の関わりに関するここまでの考察と矛盾する

ものではないと考えられる。

終わりに

ここまで、モランディからアルカンジェリに宛てられた書簡を参考にしながら、本書における削除箇所について考察してきた。そこから明らかになったのは、アルカンジェリの記述が自身の見解と解釈され、他者との関わりが悪化することをモランディが恐れていたということであった。同時に、少なくとも書簡や削除箇所からは、モランディが自身の「不定形」な作品を否定していたということは読み取れなかった。むしろ、ブランディについての削除箇所のように、モランディの自己表象に「不定形」が含まれていたことを示唆する部分もあった。以上のことから、本書が出版禁止に追いやられた理由として、アルカンジェリがモランディの「不定形」を積極的に評価したことを挙げるのは妥当でないと考えられるため、筆者はモランディの自己表象に「不定形」の作品が含まれる可能性があるとは結論づけたい。

無論、アルカンジェリの記述に何らかの行き過ぎがあったとしても、そのことが本書の重要性をそぐわけではない。むしろ、今回の考察により、モランディの「不定形」について、ブランディの記述とアルカンジェリの記述を比較し検討する必要も新たに生じたように思われる。このように、削除箇所を伴う本書は、その悲劇的な運命と相まって、モランディの自己表象及びモランディの画業全体を考える上で必須の参照点であり続けるだろう。

註

(1) Arcangeli, F., *Giorgio Morandi di Francesco Arcangeli. Stesura originaria, inedita, introduzione, apparati, note a cura di Cesari, L., Umberto Allemandi & C., Torino, 2007.*

(2) 以上のような見解に立つものとして例えば以下の著書が挙げられる。Solmi, F., *Morandi: storia e legenda*, Grafis, Bologna, 1978. 岡田温司『モランディとその時代』人文書院、2003年。Abramowicz, J., *Giorgio Morandi: The Art of Silence*, Yale University Press, New York, 2004(ジャネット・アブラモビッチ『ジョルジョ・モランディ 静謐の画家と激動の時代』(杉田侑司訳) バベ

ルプレス、2008年）。

- (3) Cesari, L., “Introduzione,” in Arcangeli, *op.cit.*, pp. 9-71.
- (4) Arcangeli, *op. cit.*, 2007, pp. 652-653（岡田温司編『ジョルジョ・モランディの手紙』みすず書房、2011年、108-109頁）。
- (5) *Ibid.*, p. 654（同書・110頁）。
- (6) Brandi, C., “Cammino di Morandi,” in *Morandi Lungo il Cammino*, a cura di Rubiu, V. B., Castelvechi, Roma, 2014, pp. 17-39（チャーザレ・ブランディ「モランディの歩み」池野絢子訳、同書・157-188頁）。
- (7) Arcangeli, *op. cit.*, 2007, p. 211.
- (8) *Ibid.*, pp. 221-222.
- (9) 政治家についての削除箇所としては他にベニート・ムッソリーニ（Benito Mussolini, 1883-1945）やジュゼッペ・ボッタイ（Giuseppe Bottai, 1895-1959）らを非難する箇所がある。それらの削除もモランディの要請によるものであるなら、その理由は本箇所の削除理由と同様のことであろうと思われる。
- (10) Arcangeli, *op. cit.*, 2007, p. 290.
- (11) Brandi, *op. cit.*, 2014, pp. 25-26（ブランディ・前掲注（6）、169頁）。
- (12) Arcangeli, *op. cit.*, 2007, pp. 252-253.